

仕事が終わリ、神崎さんからラインが来た。

ー 今日は早めに上がるうか ー

ー はい ー

二人は仕事を切り上げて、時間をずらしつつ退社した。私が街角で待っていると、神崎さんがやってきて直ぐにタクシーを拾う。この町だと会社の人に見られるかもしれないので、違う場所に移動するらしい。

到着して、そのまま神崎さんについて行くと、そこはなんと串カツの店だった。

「軽く飲もう」

「はい！」

「昼は三時近かったから、まだガッツリ飯は食えないだろ？」

「はい」

「これならおやつ感覚で良いと思って」

「いいです！」

流石は神崎さん。なんとなく私のお腹の感じも分かっている。私達は、適当に串カツを頼んでビールで乾杯をした。

「乾杯！」

「かんぱい！」

ゴクゴクゴク。

「ふう。今日は急にごめんな」

「いいんです。それよりも、もう一度聞きたいんですが、神崎さんは本当に私の事を気になってるんですか？」

「そうだ」

どうやら嘘じゃなさそうだ。勢いで言ったのなら、こんな感じにはならないはず。だったら私も本心をぶつけて良いんじゃないかと思った。

「あの…私も神崎さんが良いなと思ってたんです！」

「本当か？」

「本当です！」

すると神崎さんはホッと胸をなでおろす。どうやら断られると思っていたらしい。そして私は思い切って神崎さんに聞く。

「あの、彼女さんとかいないんですか？」

「いたら告ってない」

「あ、なるほど……」

「君はいるのか？」

「いません。いたら来てません」

「だよな」

不意に二人で笑う。

「あはは」

「うふふ」

彼は急に柔らかな表情をした。それから二人は軽く串カツを食べながら、お酒を飲んで談笑をする。

「私、神崎さんに興味があるんですけど、聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「何処のマンションに住んでるんですか？」

「ああ、代官山」

「えっ。凄い！ いいところに住んでるんですね」

「そんなでもないけどな」

「いえ。懂れます」

「新人じゃ借りれないか？」

「はい」

すると神崎さんは熱を帯びた顔で私を見て、顔を近づけて言った。

「今日、来てみる？」

「えっ……お邪魔じゃないですか？」

「邪魔なもんか。俺の部屋で宅飲みしよう」

「はい」

勢いで答えてしまう。そして私達が串カツ屋を出ると、神崎さんがすぐにタクシーを拾った。

「あ、代官山の〇〇まで」

「はい」

タクシーが走り出す。そこで私は神崎さんに、昼間に聞きそびれた事を聞く。

「あの、昼間に趣味は企業秘密って言っていましたよね？ あれなんです？」

神崎さんは苦笑いしながら、窓の外の景色を見ながら言う。

「いえない」

「だめなんですか？」

「せっかくいい仲になったのに、嫌われるから言わない」

そんな事を言われると、是が非でも聞きたくなる。

「お願いしますー！ 教えてくださいよ」

「だめだつて」

「誰にもいいませんからあ」

私がしつこく粘ると、神崎さんが真顔でこちらを振り向く。

う、なんか真剣なんだけど。ちよつと…まずかったかな？

「あ、あの。いいんです！ 言いたく無ければ」

すると、タクシ一の運転手がこちらに声をかけて来た。

「着きました」

「はい。じゃこれで」

神崎さんが会計を済ませ、タクシ一を降りる。

「マジで知りたい？」

「はい」

神崎さんは、黙って私をマンションに連れて来た。

「うわ。タワマンなんですね」

「賃貸だよ」

「おしやれ」

一階のエントランスは広くて、めっちゃキレイだった。エレベーターに乗り階層のボタンを押す。

「えっ！ 二十二階なんですか！」

「そうだよ」

「いいなあ」

それから少しの沈黙が流れた。エレベーターの中で二人きり、唐突に神崎さんが私に体を寄せて来る。

あ……。

いわゆる壁ドン。壁ドンしながら囁く。

「俺の企業秘密を知りたい？」

「……はい」

どうやら例の事を教えてくれるらしい。

「……わかった。じゃあ、今キスさせて」

「えっ…」

「教えるから」

「はい」

ちゅっ。

優しいキスだった。いきなり一線を越えてドキドキしてしまう。

そして神崎さんがぼつりと言う。

「記者にジロジロ見られて嫌だったか？」

昼間の事を思い出して、私は素直にうなずいた。

「はい。本当の気持ちを言うと、見ないでっただけで感じた」

ということ？ それと企業秘密が何か関係あるのかな？

「そういう嫌な気持ちを、スッキリと忘れる事が出来るやつさ」

ストレス解消ってこと？

「えー、どんな事ですか？」

神崎さんはニツコリと優しく微笑みながら言った。

「俺…実は副業やってんだよ」

「副業ですか？ まあ…うちの会社ダブルワーク推奨ですもんね？」

「そうそう。だから俺もいろいろと考えててさ。副業をやってるのさ」

別にびつくりはしないが…なぜ言うのをためらったんだろう？

そんな話をしているうちに、エレベーターは二十二階に到着した。エレベーターを降りて、廊下を歩き三部屋目が神崎さんの部屋らしい。神崎さんが鍵を開けて、私に中に入るように言う。私は先に入り、靴を脱いで振り向いた。

「でも…副業は結構やってる人いますよね？」

「俺の場合その副業が人に言えないのさ」

「そうなんだ」

なんだろう？ まさか悪い事でもしてる？ だったら怖いんだけど。



部屋の床は大理石のような質感で、モノトーンのめっちゃくちゃおしゃれな部屋だった。確かにうちの給料だけで、こんな高級マンションに住めるかなと考えてしまう。とにかく部屋に入り、神崎さんは冷蔵庫から瓶のビールを持って来た。

「はいフルーツビール。マンゴ味だよ」

「へえ。めずらしい！」

「美味いよ」

二人で蓋を開けて飲む。

「美味しいです」

「だろ」

部屋は見た感じ凄く豪華で、調度品も品の良い物ばかりだった。

「部屋が凄くおしゃれです」

「ふふつ。こんな部屋に住んでられるのも副業のおかげさ」

めっちゃめっちゃ知りたくなった。

「教えてほしいです。何をしてるんです？ まさか悪い事じゃないですよね？」

「悪い事ではないよ。誰にも言わない？」

「はい」

「実は俺、女性用の性感マッサージやってるんだよ」

「せいかんまつさーじ？　ですか？　何をやるんです？」

「知らない？」

「あの、性的なマッサージですか？」

「そうだ。性的なマッサージだ」

確かにそれは人には言えない副業だった。でもそんなすごい秘密を私に教えてくれた。何故かそれが嬉しかった。

「そういう副業をしている人、初めてです」

「まあ、そうそういないよな」

きつと言いたくなかったんだろうな…。神崎さんは気まずそうな顔をして、フルーツビールの瓶に口をつけた。

やばい…聞いておいて、だんまりは失礼だよな。

「ごめんなさい。無理やり聞きだして、でも手に職を持っているのは凄いなと思います！　すっごく興味ありますし！」

「誰にも言った事無いからな…。てか、興味ある？」

もちろん無くはないが、ここであるって言っているものだろうか？　まあ聞いたのは私だしな。

「あります！ まあ大きい声では言えないですけど、もちろんありますよ」

実は本気でそう思っていた。性感マッサージという言葉は聞いたことあるけど、実際どんなことをするのかは興味津々。

「本当に知りたい？」

「嘘じゃないですよ？」

神崎さんは私をじーつと見て、ぐっと顔を近づけて来る。

「じゃあ、無料でしてあげる」

「えっ？」

そして神崎さんは私の手を取り、立ち上がらせた。

「おいで」

「はい……」

リビングを出て奥に行くと、凄く落ち着くムードの寝室に入る。アロマ的ないい香りがして、部屋の真ん中にマットレスが敷いてあった。

「じゃあ、ちょっとまってて」

そうして神崎さんは、部屋の隅のダッシュボードから何かを取り出した。

「これを着て」

手に取って広げると、なんとそれは紙で出来た下着だった。

「これを着ないと、出来ない感じですか？」

「そうだね。これだとオイルがついてもいいし」

オイルがついてもいい？ そつか……性感マッサージをしてくれるんだもんね。

だけど相手が神崎さんなので申し訳ない気持ちもある。だって、二人で仕事をして来て、私だけがマッサージされるなんて申し訳ない。

「そんな…悪いですよ」

「そんな事はない。ていうかさ、知ってほしいんだ。俺の副業」

なんか、もう断れない。

「じゃあ、お願いします」

「よし。じゃあ裸になってこれを着たら呼んで」

そう言って神崎さんが部屋を出た。私が服を脱いで紙の下着をつけるが、ほとんど裸みたいなものだった。

「あの…着ました！」

神崎さんが入って来る。下着と紙下着しかつけていないので、めちゃめちゃ恥ずかしかった。すると私の姿を見て言った。

「パンティーも脱がないと汚れる。脱がせて良いか？」

「えっ…」

神崎さんは、黙ってするりと下着を脱がした。そして私にタオルを敷いたマットレスの上に寝るように言う。

「ちよつと…恥ずかしいです」

恥ずかしくて、やっぱりやめてもらおうかと思っていた時だった。

神崎さんが私の手を取った。

そしてオイルが入った便から、スーッと良い匂いのするオイルをかけた。

「あっ」

「リラックスして」

「は、はい」

そして優しく、腕から肩にかけてマッサージをしてくれる。ぬめぬめとした肌を、ゆっくりと手で擦られるだけで凄く気持ちが良かった。

「気持ちいいです」

それはまるでエステのようで、じつくりと体を撫でられてうっとりして来る。それから神崎さんが、私に腹ばいに寝るように言う。